

二河白道の図

背後から迫る盗賊や悪獣の群れ①、行く手を塞ぐ火の河②、水の河③。彼岸（浄土）へ続くせまく険しい白道④の前で、念仏者は身動きがとれません。

盗賊や悪獣は誘惑、火の河は怒り、水の河は貪り、白道は衆生の信心をそれぞれ表しています。

このとき念仏者は、此岸（娑婆）のお釈迦さま⑤（巻物のお経で表される場合がある）の「この道を行け」、彼岸から阿弥陀さまの「ただちに來たれ」の声を聞き、その声に支えられて彼岸に到ることができるのです。そのことが「二河白道の図」には描かれています。

彼岸（浄土）



此岸（娑婆）



真宗大谷派名古屋別院（東別院）

〒460-0016 名古屋市中区橘2-8-55
TEL. 052-331-9578 FAX. 052-321-3184

お東ネット

検索

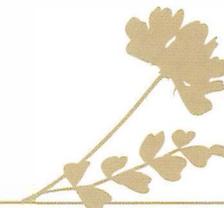
<http://www.ohigashi.net/>

お彼岸

真実の教えに出遇う

真宗の彼岸

～真実の教えに出会う～



昼と夜の長さが同じになる春分の日と秋分の日。この日を「中日」として、前後の三日間を含めた一週間が「お彼岸」です。この風習は、仏教発祥の地であるインドや中国、朝鮮半島にもなく、日本独自に培われた文化です。

なぜ、春秋のこの期間がお彼岸と言われるのでしょうか。ポイントは春秋それぞれの中日に、太陽が真西に沈むことにあるようです。

「西」という文字の成り立ちは、鳥の巣に似た籠かごの象形に由来を持ち、夕暮れ時に鳥が巣に戻ることを意味しているのだそうです。つまり、西という文字は、帰るべき家、ひいては人生の帰るところを表しています。このようなことが、人生を終えていった方を偲んでお墓参りをする風習として日本に定着したのかもしれませんが。

しかし、蓮如上人は、春秋彼岸を「昼夜の長短なくして、暑からず寒からず、(中略)仏法修行のよき節」だと述べられました。亡くなられた方を偲ぶだけではなく、むしろ、亡き人との出会いなおしをとおして、自分

自身の帰すべきところを定めよと呼びかけておられるかのようです。ならば、太陽が真西に沈むお彼岸とは、私自身の帰するところを見定めていく、いわば「仏法聴聞週間」だと言えます。

このような伝統を持つ浄土真宗ですが、最近お通夜や中陰において遺族の方から「亡くなったあの人は今どこにいますか」と尋ねられることが多くなりました。

かつての葬儀は親戚や隣近所が諸事を差し置いて集まり、いわば地域のつながりの中で営まれてきました。喪主をはじめとする遺族は、葬儀の準備・運営に直接かかわることなく、亡くなったその人を憶念する静かな時間を確保することができました。

ところが、昨今の葬儀は形態の簡素化と画一化がすすみ、地域性は失われつつあります。その一方で、自身の葬儀を思い思いにデザインするというも行われています。しかし、葬儀は、本来的に自分でデザインするもので

はなく、地域のつながりの中で創りあげるものでした。ですから、多くの人が肉親だけでなく、人の死に立ち会う経験を自然にもたらししていました。そして、この経験は自身が命終えていくことに対しても、みんなと同じだという安心感を与えていました。

現代の葬儀は個人性が強く、人の葬儀に深く携わる機会は極端に少なくなりました。このことによって、人の死そのものがブラックボックス化したのです。この状況が「亡き人は今どこにいますか」という問いを生み出しているのかもしれませんが。

大切な誰かを亡くした悲しみや不安は、乗り越えるのではなく、大切に抱きながら生きていくものです。そして、何度も何度も出会いなおしていくのです。

日本の風土で独自に育まれたお彼岸は、今まさに失われつつある出会いなおしの場を与えてくれているかのようです。この時を大切にお迎えしたいものです。

木全 和博(名古屋教区 寶泉寺 住職)